

身近な文化財

第十二話

ひな人形の
種類と流行

3月3日は「桃の節句」。ひな人形を飾り、女の子の幸福を祈る日です。現在、家庭で飾られるひな人形も、代々伝わるものから最近購入したものまでさまざまと思いますが、ひな人形にも時代ごとの流行りがあります。

現在のひな人形は一般に「古今雛」の流れと言われています。このひな人形は、ガラスなどの目を入れた写実的な顔立ちと豪華な衣装が特徴で、1800年前後から江戸で発展し、関西でも流行しました。

古今雛以前に庶民に好まれたのがいわゆる「享保雛」で、女雛の着物の裾が綿を入れて大きく膨らんでいること、男雛の袖が左右につっぱっていることが特徴です。名称の「享保」は、



▲古今雛（江戸時代後期）



▲享保雛（江戸時代後期、天神町・安田家旧蔵）



▲御殿雛（昭和30～40年代）

江戸時代の享保年間（1716～1736）の頃から作られるようになったことが由来といわれます。古今雛が主流になっても一定の需要があったとみられ、江戸時代の終わりまで作られました。

近代になると、一部地域で一般的だった様式が全国に流行することもありました。江戸から流行した段飾りとは別に、関西では雛人形を木組みの建物の中に入れて飾る「源氏枳飾り」という形も一般的でした。この流れをくむ「御殿雛」が昭和30年代前後には東日本の各地まで広がり、白河でも多く飾られたようです。

このように、ひな人形にも時代によって違いがあり、それぞれがその家の歴史や思い出を語る貴重な資料といえます。

問 文化財課 ☎2310

～自河の景観を守り・つくり・育てる～ 景観まちづくり通信 Vol.12 ◎都市計画課 内2232

おすすめ景観募集中！

日常生活で見つけた白河のおすすめ景観をInstagramで教えてください。
※詳しくは市ホームページへ



シリーズ最終回の今回は「今日からできる身近な景観まちづくり」をお知らせします。

一年を通して、景観まちづくりの必要性、地区の住民や行政による具体的な取り組みをお知らせしてきましたが、景観まちづくりは、建物の整備など大がかりなものだけでなく、私たち一人ひとりの小さな取り組みがとても大切です。

例えば、庭先の木や花の手入れをする、家のまわりのごみ拾いをする、まちを散歩して身近な風景に興味を持つなど、それ自体は小さな取り組みかもしれませんが、日々の積み重ねやまち全体への広がりにより、



愛着と誇りを持てる美しいまちをつくることにつながります。

景観は、そこで暮らす皆さんの共有の財産です。市民の皆さん、事業者の皆さん、行政がそれぞれの役割分担のもと、協力して身近な景観まちづくりに取り組み、美しい「ふるさと白河」を築いていきましょう。

